

「いつ治療が受けられるようになるのか」——。「光免疫療法」はその行方が注目されていたが、大きなハードルを越え、日本での治療が始まっている。治療法の開発者で「がんを瞬時に破壊する 光免疫療法」(光文社)の著者であり米国立衛生研究所/国立がん研究所の主任研究員の小林久隆氏に聞いた。



体にやさしい 光免疫療法 の仕組みと値段

まずは手術不能の頭頸部

2020年9月25日、光免疫療法は条件付き早期承認制度の適用となり、世界に先駆けて日本で保険治療が受けられることになった。

従来、がんの標準治療発生部位により診療科と治療法が選択・決定される。光免疫療法では、がん細胞から出ている「抗原」と、抗原にくっつく「抗体」が鍵となる。抗原別という新分類による治療なのだ。「多くの固形がんには、表面に抗原という特異的なタンパク質が発現している」と、20年の承認では、この抗体のひとつ「IR700」を用いた治療法のため、この治療法は、がん細胞のみに作用し、正常細胞にはダメージを与えない。がんの細胞膜だけをピンポイントで照射、破壊する治療法です。

従来の3大治療である手術、抗がん剤、放射線はがん以外の組織にもダメージが及び、副作用や後遺症がつきまとい、治療による免疫機能の低下という矛盾も残す。一方、この治療は、「がんを壊しながら同時に免疫をつける一挙両得を狙った治療」というが、なぜ可能なのか。

20年9月に「条件付き」で早期承認制度の適用が得られたのは、再発した頭頸部(扁平上皮がん)という「打つ手のなくなった患者」に限定される。国内では食道、胃がんの治療も進められているが、現時点での保

の抗原でも薬剤を開発し、8〜9割のがん治療が可能になるといふことです」この治療の特徴は「選択制」の高さと「二段構え」であること。何より近赤外光と薬剤は人体にほぼ無害という点だ。

従来の3大治療である手術、抗がん剤、放射線はがん以外の組織にもダメージが及び、副作用や後遺症がつきまとい、治療による免疫機能の低下という矛盾も残す。一方、この治療は、「がんを壊しながら同時に免疫をつける一挙両得を狙った治療」というが、なぜ可能なのか。

20年9月に「条件付き」で早期承認制度の適用が得られたのは、再発した頭頸部(扁平上皮がん)という「打つ手のなくなった患者」に限定される。国内では食道、胃がんの治療も進められているが、現時点での保

身が新鮮な状態で外に放出されます。この中身が健康な免疫細胞に届き、活性化させる。照射により全てのがんが壊れなくとも免疫細胞ががんを抑え込むことがわかっています」

このときに免疫メモリーがつくため、同じがんを二度と再発させないことも肝であり、小林氏はそれを実験で証明し多くの関連論文を発表している。

しかし、この治療は進化の途上で「これは終わりの始まり」だという。

20年9月に「条件付き」で早期承認制度の適用が得られたのは、再発した頭頸部(扁平上皮がん)という「打つ手のなくなった患者」に限定される。国内では食道、胃がんの治療も進められているが、現時点での保

除適用は頭頸部がんのみ。同年11月に中央社会保険医療協議会で決定された薬価収載によると、1回の治療費は1人当たり600万円程度と試算される。保険適用になる患者は高額療養費の対象となり負担は数十万円。

がんの最新治療は開発実用化までに莫大な研究・開発費用がかかるため、薬価への反映は当面は致し方ない側面もある。しかし、長年の研究が大きな節目を迎えた小林氏は11年にわたる臨床医経験から、がんが苦しむ患者を治し、副作用や後遺症も軽減できれば、との思いは強い。

「願わくば患者さんが諦めないで済む、体にも懐にも負担の軽い治療となつて欲しいのです」